

# 「元気いっぱい・笑顔いっぱい」

特別支援教育統括コーディネーター 加賀谷 勝

## 「子どもを好きでいることが一番!」

10月14日(金)、能代市特別支援教育指導員・支援員研修会を開催しました。講話とグループ協議を通して、子どもへの対応の仕方を学びました。研修会の一部を紹介します。

### 1 講話より「子どもの困り感の背景と支援について」

#### (1) 抽象的な言葉の意味理解が苦手

目で見て確認できないものを理解することが苦手なため、話し言葉を聞き取ったり、相手の気持ちを理解したりすることが難しい。(例:きちんと ちゃんと 優しいなど)  
→見て分かる視覚情報を活用して言葉のイメージを膨らませる。

#### (2) 話を集中して聞くことが苦手(聞いて、記憶して考えるなどの同時処理が苦手)

消えてしまう話し言葉を聞き取ることやワーキングメモリにも弱さがあるため、話の途中で注意が逸れてしまう。  
→名前を呼んで注意を促す。できるだけ短い話をする。視覚情報を活用する。

#### (3) 感覚過敏・鈍感(不安が強いとなりやすい)

音や光、味、匂い、暑さや寒さなどの感覚機能が敏感すぎたり、鈍感すぎたりする。  
→運動会のスタートの合図をピストルからホイッスルに替えるなど、無理に慣れさせるよりも、代替手段を考えてストレスを軽減する手立てを講じる。

#### (4) こだわりが強い(変化に弱い)

変化に対する不安から決まった物、場所、行動を続けて気持ちを安定させようとする。  
→こだわりを認めながら、許容範囲を設ける。なぜいつもと違うのか理由を伝える。いつまたできるかを伝える。こだわりを上手に活用する。(例:水遊びから拭き掃除へ)

#### (5) 人の気持ちや状況判断が苦手

経験を基に必要な情報を選んで、その場の状況に合わせた行動をとることが難しい。  
→吹き出しやト書きを利用して、見えない相手の気持ちを見えるように視覚化する。教師が子どものよきモデルとなる行動を示す。

### 2 グループ協議「子どもへの支援の仕方や担任との連携について」

・複数の子どもの担当しているため、支援できる時間が限られており支援の積み重ねが難しい。また、担任との打合せの時間が取れないため、どこまで支援してよいか判断が難しいなどの悩みが出されました。

→「個別の指導計画」を基に、担任と連携しながら、対象児の目標や手立てを共有し、一緒に評価・改善を行い、うまくいった支援内容を引継ぎ資料として残していく。

→校内の特別支援教育コーディネーターが定期的に支援員同士が情報交換できる機会を設けたり、支援員が休み時間や給食の時間を利用して担任に尋ねたりする。

- ・連携とは、本人や保護者の思い、目標、手立て、成果を共有することである。
- ・お互いに心と口を開くことで、同じ方向を向くことができる。



とれたて直送便



### ☆「A～当たり前前のことを・B～バカにせず・C～ちゃんとやる」



ある工事現場に取り付けられていた看板です。当たり前前のことを当たり前前にやるのではなく、他者がまねできないほど一生懸命やろうという意味だと思いました。発達が気がかりな子どもにとっては分かりづらいフレーズですが、現場で働く人たちにとっては、「安全第一」よりインパクトがありそうです。当たり前前にできている子どもたちを、当たり前と思わず、「頑張っているあなたをいつも見ているよ」と、肯定的なメッセージを送り続けましょう。